

課題名 アイデアコンペ

指導教員 片渕 和啓

参加コンペ名 第27回日本工業大学建築設計競技

課題 「発見する家」

主催 日本工業大学

審査員 武井 誠、足立 真、吉村 英孝

研究の目的

アイデアコンペを通して、日ごろ何気なく見過ごしている当たり前のことに着目し、「発見する家」を提案する。

作品名 「一夜の月を望む家」

コンセプト

発見は主に新発見と再発見に分けられ、その中で多くの人の共感を得やすいのは、普段意識していない事柄から得られる再発見であるといえる。そこで「十五夜の日」に着目し、地球の自転による月の移動と太陽と月の引力によって起こる潮の干満の関係性について再発見できる住宅を提案する。月は地球の周りを公転し、季節ごとにその見え方が異なるが、それは、太陽から受ける光の増減により、月が満ち欠けするためである。一般に「十五夜の日」には満月が見える。

まず、潮の干満を体感するために、建物中央に干満により床面が上下する空間「逢月庭」を設けた。この「逢月庭」は、「十五夜の日」には1時間ごとに約0.6メートルの水位の変化がおこる。「逢月庭」への移動が自由になるように、外周に緩やかなスロープを設置している。

また、逢月庭の中央から建物を見ると、位置と形の異なる合計9つの開口部がある。この開口部は、ある条件が揃わなければ建物の中しか見えない。しかし、毎年秋の「十五夜の日」になると潮の干満によって「逢月庭」から相対する二つの開口部までの角度が揃い、開口部の奥に同じ形をしたもう一つの開口部と月が顔を出す。「十五夜の日」では開口部は月を見るための月見窓として機能する。開口部の形は月の移動をわかりやすくするために、0時を基準に一時間毎に変化させる。

「逢月庭」は普段は中庭として機能するが、「十五夜の日」にだけは月と潮の干満のメカニズムについての再発見する機会を与えてくれる場となるだろう。また、月の高度は満ち欠けによっても異なるため、「十五夜の日」以外にも月が見える日は存在する。それを探してみるのもまた別の「発見」である。

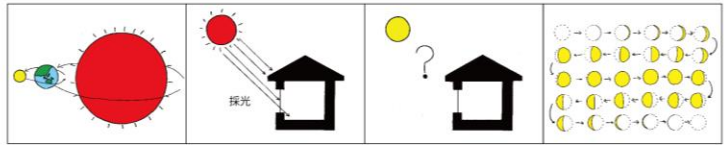
一夜の月を望む家

発見は主に新発見と再発見に分かれ、その中で多くの人の共感を得やすいのは、普段意識していない事柄から得られる再発見であるといえる。そこで「十五夜の日」に着目し、月の移動と潮の干満の関係性について再発見できる住宅を提案する。

潮の干満を体験するために、建物中央に干満により床面が上下する空間「逢月庭」を設けた。この「逢月庭」への移動が自由になるように、外周には緩やかなスロープを設置している。

また、逢月庭の中央から建物を見ると、位置と形の異なる合計9つの開口部がある。この開口部は、ある条件が揃わなければ建物の中は見えない。しかし、毎年秋の「十五夜の日」の定時になると、潮の干満によって「逢月庭」から相対する二つの開口部と月までの角度が揃い、開口部の奥に同じ形をしたもう一つの開口部と月が顔を出す。「十五夜の日」では相対する開口部は月を見るための月見窓として機能する。開口部の形は月の移動をわかりやすくするために、0時を基準に一時間毎に変化させる。

「逢月庭」は普段は中庭として機能するが、「十五夜の日」にだけは月と潮の干満のメカニズムについての再発見する機会を与えてくれる場となるだろう。また、月の高度は満ち欠けによっても異なるため、「十五夜の日」以外にも月が見える日は存在する。それを探してみるのもまた別の「発見」である。

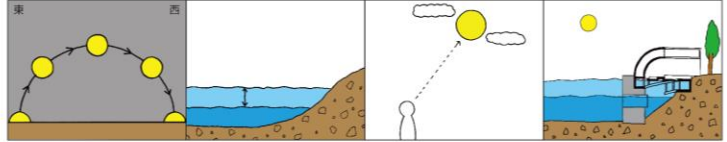


地球は太陽、月は地球の周りを回っている

昼間は開口部により太陽からの光を取り入れる

月と建築の関係はどうあるべきか？

太陽から受ける光の増減による月の満ち欠け

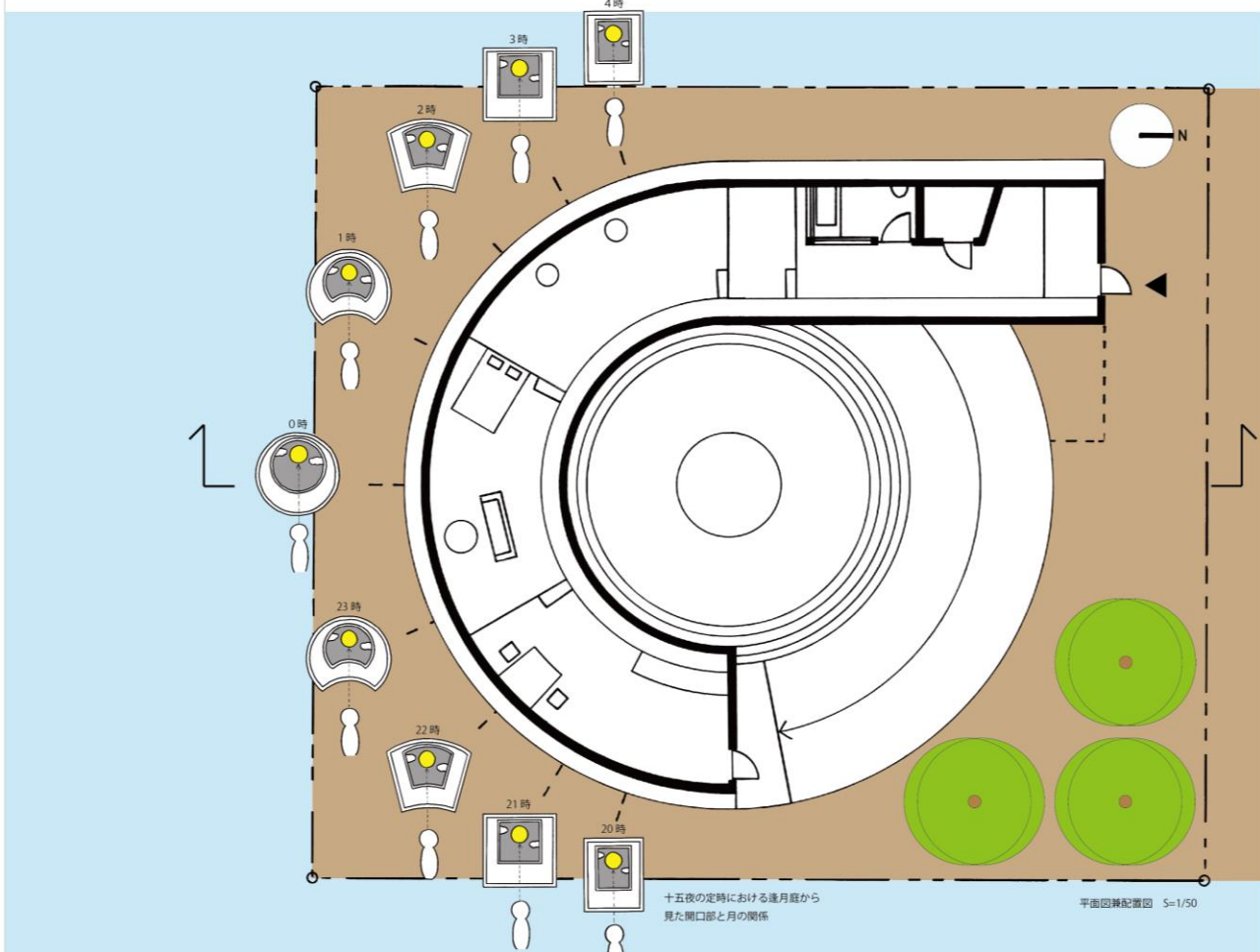


季節毎に高度を変えながら、東から昇り西に沈む月

太陽と月の引力によって起こる潮の干満

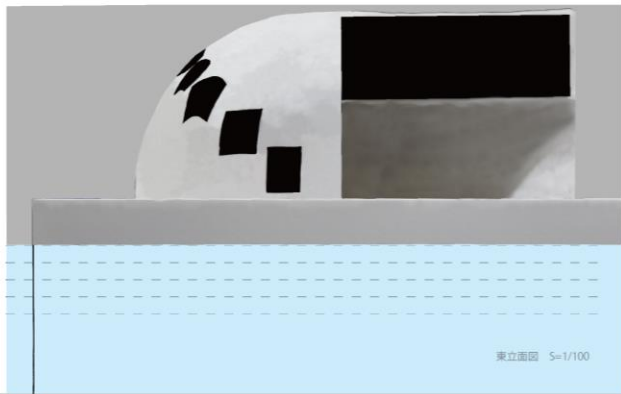
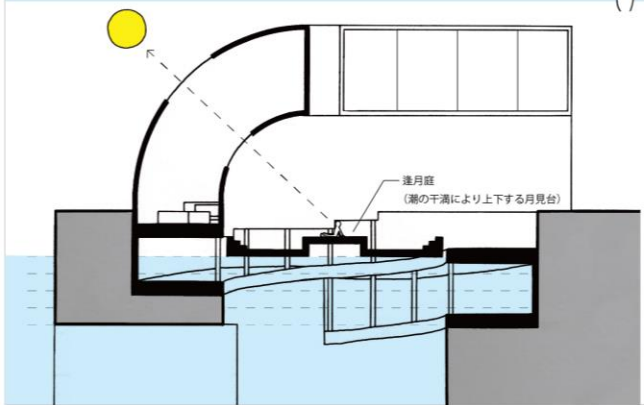
月見に適しているときとされている十五夜の月

建物周辺のイメージ図



十五夜の定時における逢月庭から見た開口部と月の関係

平面図兼配置図 S=1/50



東立面図 S=1/100